

## 104) 花の季節

花の季節がめぐるたび	思い出すのは山桜
空に向かって枝を張り	薄紅色に咲いていた
春の嵐に花びらは	自由になって空を舞い
空は瞬間ほろ酔いの	紅に染まってほほえんだ
樹の下 <sup>したみち</sup> 径は大地すら	薄紅色 <sup>うすべにいろ</sup> に化粧して
山の合間のいとなみは	時間 <sup>とき</sup> を忘れた小宇宙
両手をひろげ花びらを	すくい取ったら春うらら
見るものもなく花は咲き	惜しむことなく春がゆく
幼きころは春ごとに	母にひかれてここにきた
夢の彼方に春はゆき	すぎし記憶が目覚ます
倖せの日は駆け足で	母の姿はもういない
花に埋もれ花が咲き	花の季節が過ぎてゆく
嵐のような春風よ	大きな息をかけないで
わたしの恋もはらはらと	散りそうだからそっとして
歳月 <sup>とき</sup> が過ぎれば今日の日も	恋の生命 <sup>いのち</sup> も散ってゆく
思い出さえも今はもう	花のごとくに夢に舞う